



No. 67号

発行：盲人情報文化センター1994年10月15日

「音声訳」を考える（第18回）

録音の順序と各ポイント その5



10. 録音図書凡例（前回の続き）

前回の凡例の例で、

→「図、表（注）は別巻に録音してあります。」

と断った場合、本文の終わり方や、別巻の粹アナの入れ方について説明します。

本文の終わり方。

最終ではありませんので、コメントとしては、

「以上で、本文を終わります。テープ第〇巻は図・表（注）別テープです。この後には何も録音してありません。早送り（巻き戻し）で最後まで巻き取ってからテープを取り出してください。」

別テープの粹アナの例

「〇〇（書名）テープ第〇巻、別テープ第1巻A面。〇〇ページ、

図1〇〇〇（第1章、注1・・・）」など。

テープの巻数は、通し巻数をコメントします。カセットテープの点字表示や墨字表示は、通し巻数で表示します。別テープが1巻以内で終わることがはっきりしている場合は、

「〇〇（書名）テープ第〇巻、別テープA面、・・・」

としてもよいでしょう。

また、最初に録音図書凡例で別テープが何巻から始まるかがわかるようにコメントするとより便利でしょう。

「図・表（注）は別テープとして、テープ第〇巻から録音してあります。」

別テープ最終のコメント

「以上で、〇〇著、◎◎◎、テープ全◎巻を終わります。製作完了・・・」
とします。

録音図書凡例が一つしかないときには番号をつける必要はありませんが、
複数の場合、番号をつけるようにします。

1. トーンインデックスを使用しています。・・・。
2. 図、表については別テープに録音しています。
3. 口絵の写真は、本文の該当するところで説明しています。」

11. 目次

- ①そのまま読むと大項目、中項目、小項目の区別がつかないものは配慮する。その場合、本文や各巻の枠も合わせる。
- ②補足する言葉の大小関係
第〇部、章、節、一、その一（一ノ一、一ノ二）、マル一、（イ、ロ、ハ）など。
- ③索引、参考文献など、凡例で断って本文では省略するものでも、目次では原本通りに読む。
- ④目次の形式や本の構成がわかってから、処理を断った方がわかりやすい時には、録音図書凡例で断らず、本文中の適当なところで「音声訳者注」といって「処理」を断る。

目次の形式は、これといった決まりがあるわけではありませんので様々です。小説以外では、そのまま読んで読者にわかる目次はあまりないと言えます。音声訳者は、目次をどう読むか、まず最初に悩むことが多いものです。どのように項目をいい添えるか、本文も読んでおかないと目次だけで判断すると失敗することがあります。目次には無くても、本文で、さらに小さい項目があり番号が振られていて、混乱したりすることも起こります。本文の構成などもよく読み、目次の構成を確かめて、わかりやすい処理を研究しましょう。

目次の種類について、次回、検討します。

前回(66号)の練習問題を考える

練習問題1と練習問題3は、点訳でも点訳者注をどのように入れるかの問題で共通しています。

【練習問題1】

この問題は、同音異義語の問題です。異義語というより類義語に近いでしょう。ここでは、5行目の、「吠き声とも違う」の「吠き声」の字の処理と、「泣き声から吠き声から喃語から言葉へ」の処理でしょう。

「吠き声」は、普通「ナキゴエ」とは読めませんが、作者はあえて「ナキゴエ」と読ませ、単なる「泣き声」とも区別しています。最初に「吠き声」が出てきたところで、字の説明をした方が、あとで「泣き声」と「吠き声」が出て来た時に説明がしやすくなります。

例1. 「吠き声、ナクは、吠えるという字、吠き声とも違う 話し声とも違う
・・・」

例2. 「吠き声ともちがう、吠き声のナクは、吠えるという字、話し声とも
違う・・・」

後の「泣き声から吠き声から喃語から言葉へ」のところでは、

「泣き声、涙を流してナクの泣き声から、吠き声、吠えるの吠き声から
喃語から言葉へ・・・」

などとなるでしょう。字の説明で、「口偏に犬」とか、「さんずいに立つ」などと説明しても漢字を知っている人には伝わるかもしれませんが、知らない人には意味がわかりません。上の説明は、漢字を知らなくてもわかるように補足をしています。

普通は同音類義語などの場合は説明はしませんが、たまには区別しなくてはならないことがあります。喃語(難語?)についても引っかけがあるかもしれませんが、本文ですぐ説明があるから補足する必要はありません。

【練習問題2】

この文章は、そのまま読むと読者は混乱します。どのように断りどう補足するかは音訳者の悩むところでしょう。文章として処理するのではなく、引用された「図」として処理する必要があります。図の場合、本文を理解する

上で必要な場合は入れ、説明しても本文と同じようになる時や、本文に説明があるような時は省略しますが、そういったことも検討しましょう。

例1 「・・・詰めているようだ。音声訳者注、第二版と、第二版補訂版の記載例でシンバ、神の馬、とシンバ、新しい馬、について載っています。第二版では、1行目の「しんば」神の馬は、じんめ参照とあり、以下は空欄です。2行目のしんば、新しい馬、の説明は、「競馬用語、初めて公認競馬に参加する三歳馬。」という説明が二行にわたっています。第二版補訂版では、どちらも説明は同じですが、シンバ、新しい馬、の説明で2行目にわたる部分が、前の行のジンメ参照のあとの空欄に移っています。注おわり。このようにして・・・。」

例2 「・・・詰めているようだ。音声訳者注、第二版と第二版補訂版の例が載っています。第二版では、シンバ、神の馬とシンバ、新しい馬で3行使っていますが、第二版補訂版では、シンバ新しい馬の説明で二行にまたがる部分をシンバ神の馬の説明の空欄に記入しているため、2行で済んでいます。注おわり。このようにして・・・。」

例3 「・・・詰めているようだ。音声訳者注、以下、第二版と第二版補訂版の例がありますが、説明は省略します。注おわり。このようにして・・・」

【練習問題3】

ポイントは、説明しないとこの文章の意味が分からないところです。

「越しの中山」→「名香山」→「ミョウコウ」→「妙高」の関係を説明する必要があります。

例 「・・・妙高山はもとは「越しの中山」、コエルに真ん中のナカ、越しの中山とよばれ、それが「名香山」、ナハ、ナマエノナ、ミョウ、カハ、カオリノカ、コウスイノコウ、「名香山」と書かれるようになり、さらに「みょうこう」と読みかえられ、字も今のように「妙高」、タエナルニタカイ、の字があてられるようになったという・・・。」

「^{こうかくろう}香嶽楼」についても字の説明をする人もあるでしょうが、ここでは、コウガクロウがミョウコウにちなんだものである。とあるから、字の説明までしなくてもよいでしょう。

【今月の練習問題】

【練習問題1】

・・・ところでハエが飛ぶときにはブーンという翅音をたて、五月蠅と書かせているほどうるさいことから、けっこう騒音になる。・・・
八木 寛 著『エンジニアの昆虫学』

ポイント 補足の仕方が問題です。

【練習問題2】

名字の発祥

にわもとじ
丹羽基二 (姓名研究家)

「キミ、近頃、なにをやっているんだい？」

などと昔の友人に訊かれたりする。

「姓氏」と答えると、

「ほう生死か。宗教方面だな」

「いや、その生死でなく、女ヘンの姓のこと」

「女ヘン？女性のセックスか、そりゃあおもしろいだろう」

とくる。そうではなく「姓名の姓、苗字だよ」と言うと、ハハーン、姓名判断か、と軽蔑した目付きになる。

ま、こんなことがあって、いまは家紋や地名の研究だ、とすることにしている。わたしがいま集めた苗字の数は約二十二万。その約八十五パーセントは地名に由来する。その他は職業、屋号、佳称、信仰、特別な日くなどだ。だから、だいたい苗字は地名から起こったと言ってよい。たとえば、田中、中村、小林、渡辺などを見ても、同地名がある。そこが発祥の地なんだが、佐藤などとなると半分地名、半分は氏名だ。「佐」は下野国の佐野庄の佐で、「藤」は藤原氏の藤で、氏から来ている。鈴木などは信仰から起こったと言ってよい。

しかし、藤原氏も、もとは大和国高市郡の藤原という地名だ。また鈴木について言えば、鈴木新田、鈴木村などもあるから、これも全然地名に関係がないわけではない。



この約八十五パーセントが地名に由来するというのは、十四万の苗字『日本姓字大辞典』（角川書店）についていちいち調べたので、だいたいまちがいないと思うが、なぜ、苗字がこうも地名と密着しているかを考えねばならぬ。

さて一いままで、わたしは苗字という用語を使っていたが、ここではじめて、名字なづなという字を登場させていただく。文部省も、マスコミも、わたしが苗字と書くと、名字なづなになおす。今の概念では同じことで、家名（家号）にはかわりはない。だから自くじら立てる必要もないが、正確に言うと区別しなければならぬ。なぜなら、苗字は、「祖先を同じくする」「同じ血筋から出たもの」ぐらいの意から来ているが、名字は、「地名に由来する」「その土地を支配・領有している」という原意がある。いまは、土地所有者も昔のような意味で土地を持っているわけではない。売買で所有しているにすぎないが、中世は代々祖先から相続したものだ。だから、その土地は「自分のものであるぞ」という意味を闡明せんめいにするために、土地名と家名とを同じくしたのである。言いかえると、その土地の地名を家名にしたり家名と同じ地名を土地に付けたりする。これは、人と土地と一体であるシルシなのだ。ここから名字なづなというコトバができた。もう少し説明を加えると、名字の「名」は名田なづなでんの名であり、その「名の字」を家名にして一体観をあらわしたものである。

これが中世の名字の本質である。

のちのちには、封建武士の移動がはげしく、政変もしばしばおこり、この方式通りには行かなくなったが、原則は地名領有からおこっている（古代の名字なづなについては、複雑になるのでここでは述べない）。

一所懸命いっしょけんめいというコトバが中世に起こったのは、その「一所」に「命いのち」を懸けると言うことだ。いま、言う一所（一生）懸命に勉強するとか、スポーツや勝負に勝つために一所懸命練習するなどとは違う。封建武士が命を棄ててもその封土が守られれば、子々孫々まで、生活して行ける。すなわち永久就職ということになる。だから、主人（領主）に仕えて家来は死ぬこともできるのである。

ここに名字の迫力がある。

文芸春秋編 『エッセイで楽しむ日本の歴史』

正誤表から・・・(41)

語句	誤読	正しい読み	語句	誤読	正しい読み
合する	ゴウする	ガッする	除ける	ドケル	ノケル
御手	ミテ	オンテ	樋	オケ	トイ
唸り出す	シボリ出す	ウナリ出す	依拠	イショ	イキョ
丁髷	チョウハツ	チョンマゲ	叙述	チョジュツ	ジョジュツ

通りの読みがあって意味が異なるもの・・・(28)

頭重	ズモ 頭が重クカゾガスル、 取引用語 ズジユウ 医学用語	大空	オゾラ ダイクウ (仏)全ク何モク空デアルコト
図柄	ズガラ 図案の柄、模様 ズハイ 絵ノサマ、絵ノ品位	空腹	クワク 腹が減ること 「タテルアリヲスルコト。 ソラハラ 腹痛ヲシクヨクオウコト。腹ヲ
雪洞	セツドウ 雪穴 セツウ 木、竹ノ根ニ白紙ヲ貼り一部ニ窓ヲアケ風ヲ ノ上ヲオオイ助炭ニ用イル物 ホンホリ	専修	センシュウ モッパラソノ事ダケヲ修メルコト センジュ (仏)ヒタスヲ念仏ヲ唱エテ他ノ行ヲ 修メテ事

きれいに録音する為に (第8回)

環境音を減らす

雑音となる環境音は2種類あります。一つは、家庭の場合遮音が充分でない為、部屋の外の音や内部で発生するさまざまな音です。もう一つは、吸音が充分でない為、音声訳者自身が発する声の反響音(反射音)です。反響音はちょうど風呂場で声を出すと声が響きますが、これと同じです。これらは程度によりますが、録音図書としては聞きにくく、どちらもできる限り小さくする必要があります。生活音は、遠くで犬の吠える声が入ったり、人の話し声が聞こえたりする音でも、よく聞かなければわからないくらいのもものはそれほど気にはなりません。録音レベルの擴みを最大にして録音している人は、外部の音(雑音)は大きく入ります。適切な録音レベルを確保して、かつマイクのボリュームを絞れば、外部の雑音は小さくすることができます。

つづく

リクエスト図書一覧

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。
グループの方で引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。
録音技術のケアはさせていただきます。

- 『日月神示』中矢伸一著 <歴史>
- 『COOK BOOK』シャープ <電子調理器説明書>
- 『私の可愛いクリスマスちゃん』*手書きノート
- 『ハーブ・バラエティー 育てる・味わう・彩る』<園芸>
- 『ビワの薬療法のすべて』神谷富雄著<医学>
- 『神道の成立』高取正男著<宗教>
- 『南風 九号卒業45周年記念』<文集>

引き受けて頂いた原本	グループ
『文章の書き方』辰濃和男著 <語学>	えくてもあ
『ベラルーシの林檎』岸恵子著 芸術	えくてもあ
『人類は滅亡に向かっている』西沢潤一著	えくてもあ
『灯』5月~12月 <雑誌>	テ-プライヴ-ラ-リー-に-し-の-み-や
『日本古代史の秘密』中矢伸一著 <歴史>	テ-プライヴ-ラ-リー-に-し-の-み-や
『死刑囚永山則夫』佐木隆三著<小説>	テ-プライヴ-ラ-リー-に-し-の-み-や
『ムツゴロウ動物王国の四季』畑正憲著	みなわ
『上海より上海へ』麻生徹男著	グループ汐
『船井幸雄が読む第四の波』中島孝志著	グループ汐
『ユダヤの救世主が日本に現れる』中矢伸一著	ボランティアいずみ
『この国のかたち4』司馬遼太郎著	盲人情報文化センター

勉強会のご案内

音声訳研修の会

日時：11月25日(金) 1時半より3時半
場所：盲人情報文化センター9階ホール
内容：さまざまな文章の音訳研究。

